エミリー・ディキンスン詩抄

訳　高久真一

成功

成功を一番素晴らしいと思うのは
決して成功しない人達
花の蜜の味が分るには
欲しくてたまらぬ心が要る

今日勝つた王様の軍勢の
一人だつて
敗れ死に臨んだ人ほどはつきりと
勝利の定義は下せない

其の人の許されぬ耳にこそ
勝利の歌が
遠くから悶える様に
又はつきりと聞えて来る

喜べ

喜べ　ひどい嵐が終つたのだ
四人が岸に辿りついた
が　四十人は渦巻きかえる砂の中に
共に消えて行つた

辛うじて救われた者の為めに鐘を鳴らせ
可愛いゝ人達の為めに鐘をつけ
隣人も友も花婿も
浅瀬で踊り廻りながら

冬が戸をゆさぶる頃になると
幾度となく人々は其の遭難の話をするのだ
子供らが「でも其の四十人は？
もう帰つては来なかつたの？」と尋ねる迄は
すると沈默がその話を覆い

やさしい影が話し手の眼に宿る
もう子供らは何んにも尋ねない
波だけが応える

一つの心を
一つの心を破滅から救えたら
私も生き甲斐があるというもの
一人の人生の苦悩を和らげ
又はその痛みを楽にし
倒れそうな駒鳥を助け
元の巣に返してやれたら
私も生き甲斐があるというもの

届く所に
届く所に
触れられた筈なのに
ひよつとするとそうもしたのに
私は何もしないで其の村を
たゞぶらく〳〵通つて来た

だから気附かれずに菫が
野原に低く咲いている
いくら指が頑張つてみても
一時間前に通つたのだから
もう遅すぎる

傷ついた鹿は
傷ついた鹿は高く跳ねると
狩人の言うのを私は聞いた
だがそれは死の狂喜にすぎない
やがて来る休止は静寂

打ち砕かれる岩は迸り
鍛えられる鋼は跳返る
結核が蝕む処
頬つぺたはいつも赤い

大はしやぎは苦痛の鎧
誰れかゞ其の血に感づいて
「怪我しているよ」と叫びはしないかと
中で苦痛はその鎧を気遣う

心は喜びを
心は喜びを先ず求め
それから苦しみからのおゆるしを
その次に痛みを和らげる
あの小さな鎮痛剤が欲しいのです

それから眠りたい
そして若し其れが宗教裁判官の
御意ならば
死ぬ自由が欲しいのです

図書館で
其の当時の衣裳そのまゝの
古本におめにかゝるのは
貴重ではかない楽しみだ

その尊敬すべき手をとつて
吾が手の中に温めながら
その若かりし頃の
ひと昔かふた昔迄戻したり

プラトーが実在し
ソフオクレスも生きていた頃
サフオが乙女であつた頃
ダンテが崇めたガウンを
ベアトリチエが着ていた頃

学者達の一番の関心事は
何んであつたか
どんな競争があつたのかの
其の本の古風な説を調べたり
いにしえの文学という
吾々の心に共通して関係のある
知識をひもとくのは
特権だと思う

何世紀か前の事実に
その本は精通している
まるである人が町にやつて来て
貴方のみた夢がみんな
ほんとうだつたと云うみたい
その本は夢が播かれた所に
生きていたのだ

その本の存在は魔力
何処にも行かないでとお願いしても
右い本は皮製の頭をふつてはじらす

ものわかりある眼には
ものわかりある眼には
狂気は最も素晴らしい心
思慮分別はひどい狂気と映る
何事でもそうだが

勝を制するのは大多数
はい〳〵と同意すれば　貴方は正気
異議を唱えてごらん——
貴方は直ぐさま危険な人として
鎖でつながれます

他に何んにも
他に何んにも欲しくなかつた
他のものは何んでもよかつた

全存在をあげましようと言つたら
其のどえらい商人がにつこりした

ブラジル？　彼はボタンをひねくり廻し
こつちの方はちらとも見ないで
「でもね　マダム　今日何か他に
私がお見せする様なものは
無いでしようかね？」

魂　は

魂は自分の交友を選んで
あとは戸を閉めてしまう
その聖別された亡き人々を
もう邪魔しないで下さい

魂はその低い門前に
止つている馬車に気づいても動じない
その蓆に帝王が
跪いていても動じない

魂が沢山の人々から一人選び

それからは石の様に
注意の栓を閉めるのを
私は前から知つている

道からそれた所に
道からそれた所に
泥棒ならきつと好きそうな
さびしい家が数軒ある——
木の門が掛けてあるし
窓は低く下つている
其処から
二人が漸く通れる程の
玄関に通じている
一人は細工にとりかゝり
も一人は皆んなが眠つているのを
確めようと覗きこむ
しよぼ〳〵した眼は
仲々おいそれとは驚いては呉れない
台所は夜何んときちんと見えることか
たゞ時計だけ——

だが其のチクタクにはさるぐつわも出来る
それでもねず公はチユとも言うまい
それから壁も默つている
何も言いはしまい

眼鏡がキラツと光る——
暦は知つている
金色の額縁が眼ばたきしたのか
それとも神経質な星だつたのか？
お月様は誰れが其処にいるのか見ようとして
階段をすべり降りる

掠奪だ——何処で？
大盃　匙
耳飾り　宝石
時計　古めかしいブローチ
其処ですやすや眠つている
おばあさんに似合う様な

夜が明けると又ガタ〳〵うるさい
隠密仕事はゆつくりだ
お日様は三本目のプラタナスの所迄
昇つた

雄鶏が金切声をはりあげて
「誰れだい　其処にいるのは？」
すると山びこが次から次へとひやかして
「何処にさ？」
其の時　年老いた夫婦が
丁度起き出して
朝日が其の戸を少し開けたのだなと思う

羽飾りをつけた行列で
天使達が彼等の為めに
次から次へと足並み揃え
雪の制服をまとつて行くのを

声をはりあげて
声をはりあげて戦うのはとても勇ましい
が　もつと雄々しいのは
胸の中に
悲痛と云う騎兵隊を進撃させる人々
誰れが勝つかは何処の国も見やしない
誰れが負けても皆んな知らぬ顔
彼等の死に際の眼をみても
何処の国も愛国者だとは思いもしない
私達は信じている

夜明け
夜も終りに近づき
空間に触れられる程
朝日も直ぐ其処迄来たら
髪をなでつけ
ゑくぼをきちんと直して
それからたつた一時間ふるえあがらせた
今はもう古びて色あせた真夜中を
好きになれたか訝る時間です

苦痛の神秘
苦痛には空白の要素がある
それが何時から始まつたのか

又は一日でも無いことがあつたかは
想い出せない

苦痛はその時だけ　未来が無い
その無限の領域には
その過去を有ち　次に来る苦痛を
より感じせるのだ

決して醸造されない
決して醸造されないお酒を味わう
真珠色にくみあげた大盃から
ライン河畔の大桶だつてみんながみんな
こんなお酒を造る訳ではない

私は空気でいゝ御機嫌
お酒ときたら大飲み助
そして終りそうもない夏の日々に
とろけた水色の宿屋から
よろ〳〵歩いて出る

花の主が醉つぱらつた蜜蜂を
ヂキタリスの戸口から追い出したり
蝶々が一杯やるのを止めたりしたら
私はもつと〳〵飲むだけです

可愛い飲んべえさんが
お日様にもたれかゝつているのを
天使達が真白の帽子をふり
聖者達が窓に走つて見に来る迄

憎む暇など
憎む暇などありませんでした
お墓が邪魔しそうだつたのです
人生はそんなに長くはなかつたのです
憎しみを持ち続ける程には

愛する暇もありませんでした　でも何か
一生懸命やらなければいけませんから
ちつぽけな愛の努力が
私には丁度いゝなあと思いました

軌道に乗つていれば
軌道に乗つていれば
頭脳は一様に走り　正確だ
だが何かの棒きれで常軌から
そらせようもんなら
洪水が丘又丘をひきさき
自分の道路をきりひらき
粉搗場を飲みこんでしまつた時に
その水を元へ戻す方が
未だ容易です

花と一緒に
貴方の胸についているお花の中に
私はかくれます
貴方は私をもつけます　感づかないで
あとは天使様が御存知です
私はお花の中にかくれます
貴方の花瓶に入つて色褪せて
御存知ないから貴方は私に向つて
淋しそうなお顔をなさる

貴方が若し
貴方が若し秋にいらつしやるなら
私は夏を追払つてやりたい
一寸微笑んで一寸荒つぽく
丁度奥さん連中が蠅にする様に
一年したらお会い出来るというのなら
何ヵ月もころ〳〵まるめて
其の時がやつて来る迄
別々の抽出しにしまいこむのに
何世紀もぐずついたとしたら
私は指でどん〳〵数え
指がヴァン・ディメンの土地に
落ちる迄差引いてあげる
此の世が終つても
貴方と私との人生が必ずあるのなら
此の世なんてリンゴの皮みたいに捨て
永遠を味わうのだが
だが今は時のさだめない翼の長さが
皆んな分らない儘

此の世は私をせきたてる
針のことは黙つている鬼蜂の様に

不　安

極楽は
真ぐ隣りの部屋程近い
若しその部屋に友が至福か絶望を
待つのであれば

人の心は何んと勇気のあることか
それはじつと堪える
近づく足音と
ドアの開くのを

私の川は

私の川は貴方に流れる
青海原さん　歓迎する？

私の川はお返事を待つ

おゝ海よ　優しくして
私はあちこちの隅つこから
沢山流れを連れて来ます

だから　海よ
私を受入れて下さい

貴方の小さな

貴方の小さなお心の中に
こんな小川があるかしら
そのほとりには　はにかみやの花がそよぎ
小鳥が顔を赤らめて水を飲みに来るし
影がちらゝ〳〵揺れる

小川が其処にあるなんて
誰れも知らない
あんまり静かに流れているから
でも貴方の生命の水は
毎日そこから掬まれるのです

三月にはその可愛いゝ小川を
覗てやつて下さい
どの河も洪水で
雪融け水が山々から急ぎ
あちこち橋が流れる時ですから

ずつとその後で　そう八月にでも
どの牧場もから〳〵に乾いたら
気をつけて下さいね
此の可愛いゝ生命の小川が
いつかの暑い真昼に乾いてしまわぬ様に

移植して

北極の近くに生えた可愛いゝ花が
ぶら〳〵緯度を下り
夏の大地
太陽の大空にやつて来て
風変りな色濃い花の群れや
聞きなれぬ声の小鳥に
めんくらつたとしたら
若し此の可愛いい花が
エデンの園に迷いこんだら
それから？　ええ　もうそれまで
其処からは貴方の御想像だけ

草

草のすることつて　ほんの僅か
緑一色の面で
たゞ蝶を抱いたり
蜂をもてなしたり

日がな一日　そよ風の奏でる
可愛いゝ調子に合せて揺れ動く
前掛に陽を受けて
誰れにでもおじぎをする

一晩中　露に糸を通して
真珠みたいにしておめかしする
こんな思いつきに比べたら
公爵夫人もたゞの人

草は死ぬ時だつて

聖い香りにつゝまれるだけ
そこら辺の薬味だの
松のお守りが眠る時

それから豪華な納屋に住み
毎日々々夢みて過す
草のすることつて　ほんの僅か
私も乾草になつてみたい

お花を
お求めになりたいでせう？
でも私は売れません
若し借りたいとお思いなら

水仙が村の戸口の傍に
黄色のボンネットを開く迄
クローバーの叢から蜜蜂さんが
白葡萄酒を集める迄

えゝ　それ迄ならお貸ししましよう
だけど　それ以上は默目　一時間でも

いわなしの花
うす紅色で小さく　几帳面
香りがよくて背は低い
四月にはこつそり
五月にはひよつこり

苔とは仲好し
饅頭山とはお知合い
駒鳥に次いで
誰れの心の中にでも

目立つ可愛いゝ美しさ
お前の飾をつけると
自然は古いものを
ぬぎすてる

歌の禮拜
教会に行つて
安息日を守る人もありますが
私は家で過します
米食鳥は聖歌隊

果樹園がその円天井

白法衣を着て
安息日を守る人もありますが
私はたゞ翼をつけるだけ
教会の鐘を鳴らす代りに
ちいさな堂守が歌います

神様が説教される——
名高い牧師さま
お説教は長くは御座いません
だから　しまいに天国に入る代りに
私はこまゝずつと参ります

人手によらない

人手によらない
眼には見える小さな道路
通れるものは蜂の轅か
蝶の二輪車

その道のはてに町があるかどうか
それは私には言えません
私はたゞ溜息をつく——その道に沿つて
私を運んで呉れるものとてないと

予感は

予感は陽の沈むのを知らせる
芝生の上のあの長い影
びつくりしている草への知らせ
暗やみがやつて来ると云う

蜜蜂

水平に飛ぶ蜜蜂は
絹綿ビロードのレールを走る汽車の様に
私には聞える
お花の所で軌る音
花のビロード細工が立ち向うが
蜜蜂の甘い襲撃で
花の武侠は到々尽きてしまう

勝ちほこつた蜜蜂は
他の花房を襲おうと踵をかえす

その脚には薄絹の靴を穿き
兜は黄金づくり
胸には緑玉髓つきの
縞瑪瑙を一つはめてある

働けば一つの歌
怠けても一つの調べ
あゝクローバーにそして真昼に
蜜蜂の有つその経験

おやすみなさい
「おやすみなさい」とお客様に言つて
いやいや行く子供等の様に
私のお花は可愛いゝ唇をきゆつとあげて
それから夜着をまといます

眼をさましては朝が来たのが嬉しくて
はしやぎ廻る子供の様に
私お花は
沢山の寝床からそつと覗いて
それから又跳ね躍ります

二つの世界

ずつと向うだからとて違いはせぬ
四季はそのまま御座います
朝はやがて昼と花さき
焔の莢を割りまする

野生の花は森に燃え
小川は日がな一日　自慢話し
キャルヴァリを過ぎるとて
蜂を黙らせる掠鳥は
一羽だつて居りませぬ

異教徒の火刑も審判も
蜂にはかゝわりありませぬ
けれど　ばらとのお別れは
みぢめな思いで御座います

緑玉髄の

緑玉髄の部屋に懸かつた
蝶のぶつたガウン
今日の午后お召しになつた

ニューイングランドの町などに
わざ〳〵舞い降り
きんぽうげの友達になるなんて
まあ何んと謙譲な

秋

来る朝は次第に前より柔く
くるみは段々色がついて来る
苺の頬はふくらむし
ばらは町には見えません

楓は派手な肩掛けを着て
野原は真赤なガウンを着る
私も流行に遅れない様に
ちいさな飾りでもつけましよう

空は低く

空は低くたれこめ　雲は意地悪
雪が一片ひら〳〵と
納屋を横切つてか溝を通つてか
どつちがいゝかと思案する

誰れかゞこんなに扱つたんだと
こせ〳〵した風が一日中こぼす
私達と同様　自然は時々
花の冠り無しの時もある

冬のひるさがり

冬のひるさがり
光は斜め
大伽藍の調べの様に
重くのしかゝる

それは天の痛みを人に伝える
だが　意味のあるのは
内面の違いだけ
傷痕とて見つからない

何者もそれには教えられない
それは封印　絶望――
大気から送られた
無上の苦悩

それが来ると景色が耳をすまし
影が息をひそめる
それが行く時は死の面にある
よそ〳〵しさの様

一日

お日様がどんな風に昇つたかお話しましよう――
ひとゝきのリボンです
教会の尖塔が紫水晶の中を泳ぎ
其の知らせがりすの様に走りました

山々は帽子の紐をゆるめ
米食鳥が鳴き始めました
それから私はこつそり独り言
「あれがお日様だつたに違いない」

どんな風に沈んだかは知りません
紫色の階段が其処に見え
小さな黄色の子供達が
ずーつと行つた様子です

そして到々向う側へ着いた時
灰色服の牧師さんが
夕べの横木をそつとはずして
皆んなを連れて行きました

生と死

どの幸せな花をも
驚かさない様に見せかけて
霜はひよつとした拍子に
面白半分にその首をはねる
此のブロンドの刺客は次に進み
太陽は平然と巡り行く
神の認可のもと
次の日を推める為めに

小春日和

ほんの僅か一羽か二羽
小鳥が戻つて来て
ふりかえつてみる
此の頃はそんな日々

空が昔なつかしい六月の詭弁を
身にまとう――青くて金色の誤解
此の頃はそんな日々

おお蜜蜂を欺せないペテン師さんよ
あんまり尤もらしいので
私もほんとに春かと思いこみそう

種が揃つて証拠を示し
移り変つた空気を横切り
おずく〳〵した葉が一枚
音もなく急ぎ行く迄は

おゝ夏の日の聖奠
おゝ霞の中の最後の交りよ
子供を一人加えて下さい

お前の聖い象徴に与り
聖別されたパンを共にさき
お前の不死の酒を味わうのに

帆をあげて

大きな喜びは
奥地の人が海に行くこと――
家々を過ぎ　岬を過ぎて
深い永遠へ

山の中に育つた私達
船乗りさんには　陸を少し離れる時の
素晴らしいうつとりした気持ちが
解つて貰えるかしら？

私は美の為めに

私は美の為めに死んだ
が　墓に未だ落着かない中に
真理の為めに死んだ人が

直ぐ隣りの部屋に葬られた

どうして死んだのと優しく尋ねたので
「美の為めに」と私は応えた
「そう　私は真理の為め　二つは同じ
私達は兄弟同志だね」と彼が言つた

そこで身内のものが或る夜会つたみたいに
二人は部屋をへだてて語り合つた
苔が唇の所に生えのぼり
二人の名前を被つてしまう迄

ほんとうの
私は苦悶の表情が好きだ
それは本物だから
人はひきつけを装つたり
激痛のふりなんかしないもの

眼が一度どんよりしたらもうそれは死
ひたいの上の数珠を
ありふれた苦痛で糸を通した

ふりなんて出来はしない

私はかつて
私はかつて見た　死際の眼が
何かを探し求めている様に
部屋中をぐるぐる走り
やがて次第に疊つて来て
それから霞でぼんやりし
それが何であるかを打明けずに
到々ぴつたり閉じたのを
それが見当てたのならよかつたのに

避難所
雲は重なり合い
北がおし出して来た
森は倒れんばかりに駆け
稲妻はねずみの様にとびはねた
雷はがらがらと崩れ落ちた——
お墓の中にやすらかに居るのは

何んといゝことか
自然の怒りは届かないし
復讐などありつこない

私は荒野を
私は荒野を見たことがないし
海も見たことがない
でもヒースがどんなだか知つているし
波がどんなものかも知つている

私は神様と話したことはないし
天を一度も訪れたことはない
でも案内図を渡されたかの様に
その場所がはつきり分る

あのひとの
あのひとの生きていた最後の夜
死に際の人を除いては
普通の夜であつた

でも私達にはすべてが変つていた
前には見すごしていた
どんな小さな事にも気がついた
私達の心にさす此の大いなる光で
私達は云わば験められたのだ

あのひとがこと絶えるのに
他の人達は生きていられる
あのひとへの嫉妬がむら〳〵と
限りなく起つた

あのひとが逝く時私達は側に居た
重苦しい時だつた
私達の魂は押合つて何も喋れない
到々兆がやつて来た

あのひとは口を開き　やがて忘れた
そして葬の様にかろやかに
水の面にかゞみ、かすかに震え
うなづいて　逝つた

私達は髪を直し

頭を上に向けた
それから私達の信仰をとゝのえる為めの
厳粛な時の流れ

死の翌朝

死の翌朝
家の中でのざわめきは
地上で為される営みの中で
最も厳粛なもの

心をすつかり掃ききよめることゝ
あの世迄
又と使うことのない
愛をおしやること

馬　車

「死」の為めに止まることが出来なかつたから
「死」が親切にも私の為めに止まつて呉れた
馬車は私達だけをのせて行つた

それから「不死」
私達はゆつくり行つた
死は急ぐことなんかしない
私は仕事も余暇も追い払つて置いた
「死」への禮儀の為めに

子供らの遊んでいる学校を過ぎた
そこでは勉強はさつぱり駄目
物珍らしげな穀物畑も通りすぎた
陽の沈むのも見やつた

地面がたゞふくれあがつた様な
ある家の前に私は止まつた
屋根なんて殆んど見えず
軒はたゞの塚

それから何世紀もたつた
だが一世紀とて短い気がする
馬の頭は永遠に向つているのかと
初めて思つたその日一日よりも

解放

どんな拷問も私を苦しめることは出来ない
私の魂は自由
此の死すべき肉体の背後には
鋸では痛められない

刀でもひき裂けない
もつと強いものが結びついている
だから二つの身体
一つを縛つても他の一つが逃げ去る

お前自身が
お前の敵である場合の他
巣に居る鷲だつて
お前ほど容易に

空を舞い降りたり
翔け昇つたりはしない
束縛は意識
自由もそうだ

亡くして

先日私は世界を亡くしました
何方か見つけません？
その額のまわりに
星が一列つけてあるので分る筈です

お金持ちの人なら気がつかないでしょう
でも私のつましい眼には
お金以上に大事なもの　私の為めに
どうぞ見つけて下さい　お願いです

駒鳥が

駒鳥がやつて来た時
若し私が死んでいたら
赤い頸巻きをしたあの一羽に
記念のパン屑をやつて下さい

たゞ眠つているばかりで
貴方にお禮が言えなくても
私が御影石の唇で
言おうとしているのが

お分りになるでしよう

時が終つたら
時が終つたら何故か分るだろう
だから私はもう何故とはきかない
キリストが空のきよらかな教室で
苦悩の一つ一つを説明なさるだろう

ペテロが何を約束したかも話して下さる
私はキリストの苦難に驚いて
今私に焼きついて離れない
此の苦悩の雫を忘れることになるだろう